

東京電力(株)福島第一原子力発電所における
中長期措置検討専門部会構成員からの提出資料

会津大学 角山 茂章

燃料プール内の燃料の取り扱いは、高放射線場で、大規模な瓦礫を取り除き、プール内の燃料を安全な場所へ搬出するという、Step 2後の工程の中で、住民にリスクを与えうる大変重要な作業である。

前回の部会で述べたように、もんじゅや常陽で、同じような作業工程の中で、トラブルが発生している。また、柏崎の地震時に燃料プール水がスロッシングと思われる現象で流出し、結果として海にまで僅かではあるが届いた。プラント修理の工事工程の検討段階で、リスク管理を事前にしておけば、オペフロからサイト外への経路を塞いでおく必要性は気づいたはずだが、地震後に電力から聞いた話では、このようなリスク管理的な検討は行われなかったということであった。

また、一般に瓦礫除去の作業は解体業者が行うと思われるが、彼らは目の前の瓦礫の搬出には配慮を払うと思うが、その周囲にある配管や機器が、原発の安全確保に寄与しているかという視点は欠落する可能性はありうる。

このような経験や状況を真摯に受け止め、リスク管理を事前、また工事の各ステップでしておくことは、更なる住民への被曝抑制には大変重要であり、現場の知識を持った技術者と十分な検討を行っていただきたい。また、その様な検討結果を地元の説明することは、住民の理解を得るにも必須と考えられる。

例

- ・ 工事ミスがあった場合の原子炉冷却機能、窒素封入機能、燃料プール冷却機能の確保。
- ・ カバーリングでは、放射能物質の流出が、厳密には管理された状態とは言えないので、緊急時に遅れを持たずに、放射性物質の飛散を抑制するシステムの確保。
ベントの操作遅れのように、その様なことは起こらないという前提で、準備を怠ることは許されない。
- ・ 長期に亘ることと、自治体自体が疎開しているため、緊急時の全ての自治体への連絡方法と、避難指示体制の再確認。